

旧遠山家民俗館

白川郷の南端近くの御母衣の集落にある遠山家は、伝統的な合掌造り農家家屋の主な特徴をすべて示しています。これには、乾燥したススキを使って茅葺きされた急勾配の三角形の屋根や、切妻造りの両側に窓を持つ広々とした多層式の屋根裏部屋、1 階の真ん中に置かれた囲炉裏、および焰硝（火薬に不可欠な原料の硝酸カリウム）を作るための床下の穴などが含まれます。この家は、1850 年頃に当時の御母衣で最も大きく影響力のあった遠山家のために建てられ、1967 年まで住居として使われました。最大 48 人の大家族が、同じ屋根の下、ここで暮らしていました。農地が乏しく、養蚕などの家内工業に全員の労働力が必要だった御母衣のような集落では、そのような居住環境が普通でした。

重要文化財に指定されている遠山家は民俗博物館に改装されており、訪問者はここで、江戸時代（1603～1867 年）後期から明治時代（1868～1912 年）にかけてこの辺りな山間の地域でどのような暮らしが行われていたのか学ぶことができます。玄関の脇には焰硝用の穴があります。かつてはこの穴を藁、土、ヨモギ、蚕の糞などの材料でいっぱいにして、発酵させていました。数年かかる発酵プロセスを促進するため、近くの野外トイレから尿が穴の中に引かれました。この家の住人が住んでいた 1 階には、寝室が何部屋かと食事部屋が 1 つ、仏壇、および客をもてなすために使われた部屋があります。居住区と台所、浴室、仕事部屋は廊下で分かれています。住居の至るところに食器類や調理器具、農業・漁業・狩猟のための道具、およびその他の品物が展示されており、一家がどのように暮らし、生活の糧を得ていたのか説明しています。屋根裏部屋は主に養蚕のために使われました。この空間にはそのための設備や、生糸を繰糸するための器具が展示されています。

1935 年、遠山家はある客の訪問を受けました。この人物の白川郷での体験のおかげで、合掌造りの建物の評判が初めて海外の人たちに広がりました。この訪問客はドイツ人建築家のブルーノ・タウト（1880～1938 年）で、3 年間日本に滞在してこの国の建築様式を詳細に調査した人物です。彼は著書の中で合掌造りの家屋をスイスアルプスの農家の家屋と比較し、その「合理性」とシンプルさを称賛しまし

た。タウトの言葉が後に地元の人々を刺激し、それらの建築物を保存する取り組みにつながったのかもしれない。